沖縄から八重山諸島に分布するウラナミジャノメの仲間は、リュウキュウウラナミジャノメ、マサキウラナミジャノメ、ヤエヤマウラナミジャノメの 3 種で、マサキウラナミジャノメは石垣島と西表島の固有種だが個体数は多く、両島においてはごく普通種となっている。一方、リュウキュウウラナミジャノメは裏面の波状白模様が色濃くてよく似ているが、沖縄本島より南には分布しなく、逆にマサキウラナミジャノメは石垣島より北には産しないので、それぞれの同定を間違う心配はない。

筆者は 1995 年に沖縄名護市伊豆味地区への二度目の訪問時、初めて本種に出会っているが、そのときには本種がのちに準絶滅危惧選定となる希少種であることには気づいていないし、ビデオカメラを携行していたのに撮影記録もとれていない。他のいくつかの種でも、筆者自身による撮影記録がない場合、八重山の蝶に関してビデオ記録によるチョウの生態研究分野で偉大な功績を残された、今は亡き金子實氏による撮影記録から、氏の了解を得て生きたチョウの姿を引用させていただくことにしているが、以下に八重山蝶紀行から抜粋する。

Oct. 30, 1995：名護市伊豆味

『真紅のハイビスカスを訪れる伊豆味のツマベニチョウ』としてビデオ記録をしたいが，ツマベニチョウは次々と訪花位置を変えて活発な求蜜を繰り返すため映像チャンスがなかなかつかめない．その群れの中から完全体のツマベニチョウ♂，同じく黒い模様の濃い♀を採る．南国ならではの白化型美麗ナガサキアゲハの♀も完全体であることをしっかり確認して捕獲する．舗装道路は勾配をあげながらカーブして峠に続く．途中の薄暗い路傍でリュウキュウウラナミジャノメが飛ぶ．このとき，のちに準絶滅危惧選定種となる希少種であることには全く考えが及んでいない．峠の道路脇には四国や関西にも見られるクサギの大木が花盛りで，ナガサキアゲハが複数頭熱心に蜜をあさっている．左手には造成途中という感じの赤土が多い広場があって，その林縁に咲くセンダングサにはベニモンアゲハやリュウキュウアサギマダラが訪れており，広場の方のまばらな叢にはリュウキュウミスジの雌雄が追飛を繰り返しながら戯れている．

Copyright© 2009- Soft House JUMP. All rights reserved.